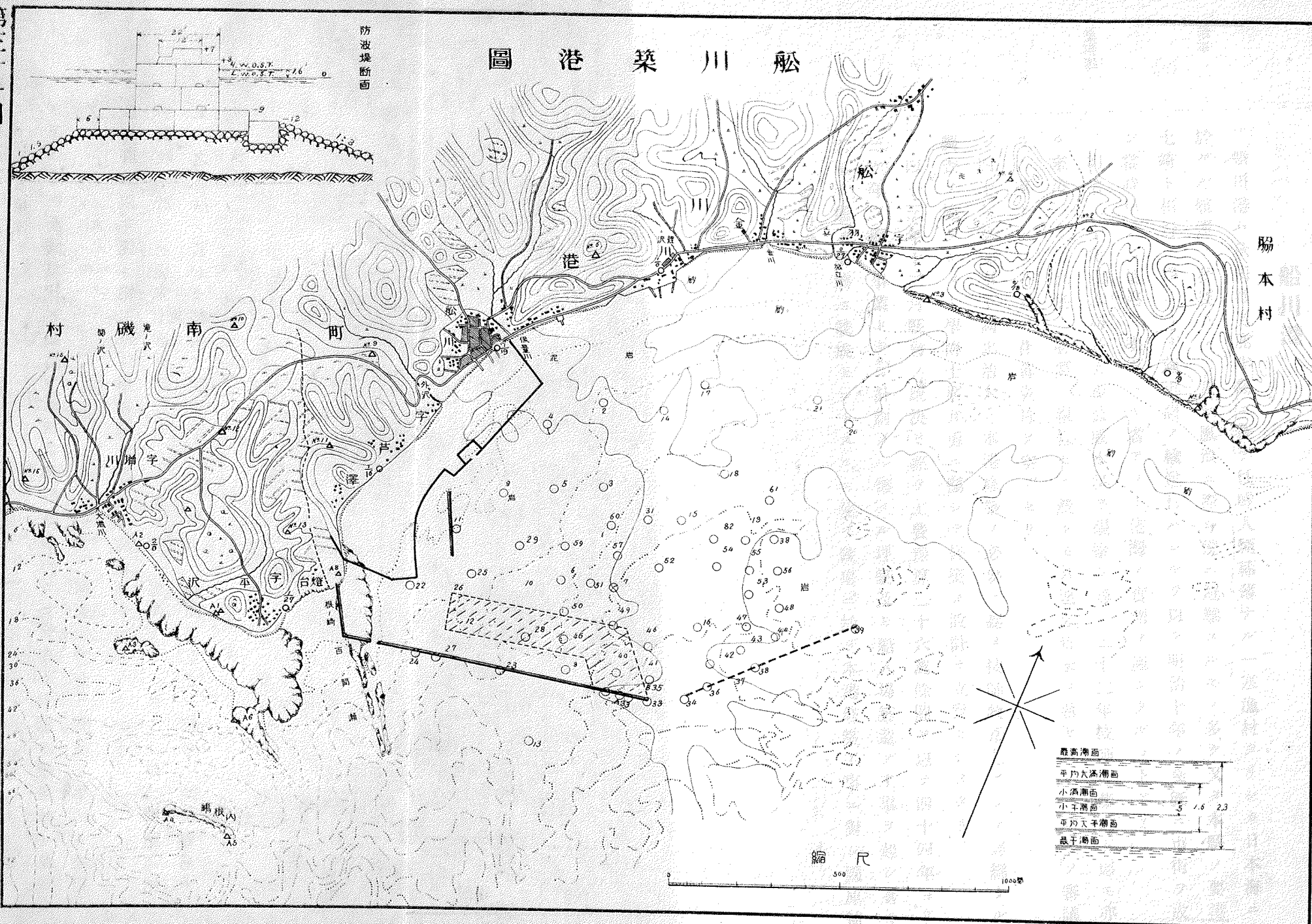


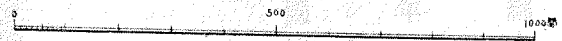
船川築港圖

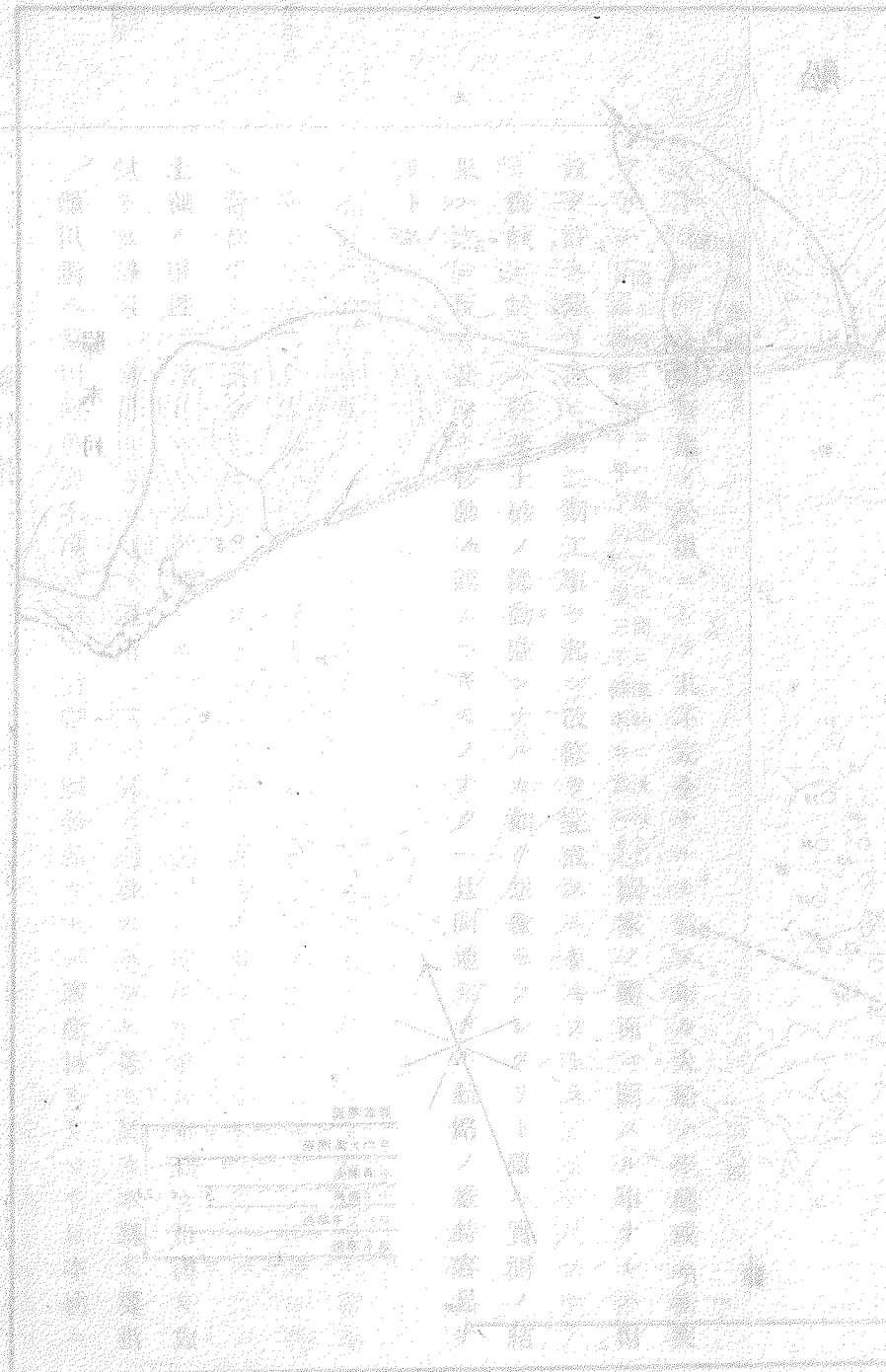
防波堤断面



| | |
|--------|-----------|
| 最高潮面 | |
| 平均大潮潮面 | |
| 小潮潮面 | |
| 小干潮面 | 5 1.6 2.3 |
| 平均干平潮面 | |
| 最低潮面 | |

縮尺





船川港

沿革

船川港ハ秋田縣男鹿半島ニ在テ往時人煙稀薄ナル一寒漁村タリシカ日本海ニ於ケル航運ノ發展スルニ及ヒ風浪ニ際シ爰ニ避難スルモノ多ク又タ本縣ノ要港土崎ト相對シ舩ニヨリ兩港間ノ輸送行ハレルヲ以テ明治十年ノ交既ニ市街ヲ成シ當時早クモ築港ヲ唱導スル者アリテ港灣ノ實測ヲ施シタルコトアリ

築港案

明治三十年土木局長古市公威本港ヲ視察シ尋テ三十二年技師近藤虎五郎モ亦タ來港シ本港修築ノ必要ヲ報告セリ然トモ氣運當時未タ熟セスシテ政府ノ審議スル處トナラスシテ荏苒歲月ヲ空フセリ

四十年縣知事下岡忠治大ニ本港修築ノ必要ヲ認メ技師牧彦七ヲシテ詳細ナル調査ヲ施サシメ工學博士廣井勇ニ囑シテ修築ノ設計ヲ立案セシメタリ

四十三年十二月縣會ノ議決ヲ經テ工費豫算三十六萬餘圓ヲ以テ四十四年ヨリ三ヶ年ノ繼續事業トナシ計劃ノ一部タル埋築及ヒ船入場築造ノ工事ヲ起シ著々工事ヲ進メ其將ニ竣成セントスルニ先チ政府ニ於テ本港修築工事ニ對シ國庫補

助下附ノ内議アリタルヲ以テ大正四年縣會ニ於テ既成工事ニ加フルニ本計劃ノ大部分ヲ以テシ之ヲ第一期工事ト稱シ總工費ヲ三百十四萬餘圓ト算シ其半額ヲ國庫ニ仰キ四十四年度ヨリ起算シ十二ヶ年ノ繼續事業トナスニ決議シ政府ノ許可ヲ得テ工事ヲ續行スルニ至レリ

然ルニ歐洲ノ戰亂ハ本工事ニモ亦タ影響ヲ及ホシ物價賃銀ノ昂騰ハ豫算ノ不足ヲ生シ且ツ工事ノ進捗ニ伴ヒ多少設計ノ變更ヲ要スルモノアリタルヲ以テ大正十年總工費ヲ四百九十八萬圓ニ改メ其半額ノ補助ヲ得同時ニ竣工期ヲ大正十七年トナセリ

先は大正五年十二月船川鐵道開通シ築港工事ノ進捗ト共ニ港勢ノ發展ニ資シ大正十三年末ノ調査ニヨレハ町ノ戶數千三百餘ニ及ヒ同年内ニ入港セル商船ハ二百六十九隻十三萬三千登簿噸ニシテ輸出入貨物ノ量二十萬噸ニ達セリ

築港工事

船川港ノ地勢タルヤ北西ノ二方ハ山丘ニヨリ庇蔽セラレ東モ亦タ陸地遠カラスト雖モ東南ニ向ヒ漸次距離ヲ加ヘ土崎港ヲ距ルコト七里トス

港勢

地勢

風

漂砂

風向ハ秋冬中ハ專ラ西乃至西北ノ間ニアリテ船舶ノ避難スルモノ多クハ此季ニアリ夏期ハ南西風多ク其速度三十米ニ達スルコトアリ故ニ修築工事ハ西南ニ防禦ヲ施スヲ以テ緊要ナリトス

漂砂ハ南風ニ際シ多少東南岸ニ沿ヒ進行スルモノアリト雖モ敢テ恐ル、ニ足ラス

明治四十年ニ成案シタル修築工事ノ設計ハ大體第三十一圖ニ於テ實線及ヒ破線ヲ以テ示セル如クナリシヲ財政ノ關係上之ヲ縮少シテ先ツ實線ノ部分ノミヲ施工スルニ至リタリ即チ大要左ノ如シ

- 一 防波堤 半島堤延長千七十一間
- 一 掘浚 面積十二萬餘坪
- 一 埋築 面積十四萬餘坪
- 一 船入場 二ヶ所

防波堤ノ構造ハ深淺及ヒ海底ノ地質ニヨリ之ヲ異ニスル處アリト雖モ其大部分ハ添圖ニ示ス如ク捨石ノ上ニ二十乃至三十噸ノ混凝土塊ヲ積疊シ上幅二十二

防波堤

船川港

尺高サ干潮面上三尺トシ幅十二尺高四尺ノ場所詰ヲ以テ之ヲ冠セリ堤頭ハ三十
四尺ノ方形トシ方塊ヲ積疊ス

海底ハ概シテ軟岩ニシテ處々ニ砂及ヒ粘土ノ薄層之ヲ掩フアルヲ以テ掘浚ニ
ハ四乃至十噸ノロブニツツ碎岩機ヲ用ヒ碎片ハ汲揚及ヒ擱揚浚渫機ニヨリ之ヲ
除去セリ

船入場ハ沿岸漂砂ノ爲メ多少淤淺セラレ年々約五十立坪ヲ浚渫スルノ必要ア
リト云フ

本工事ハ縣ノ經營ニ係ハリ技師湯川秋生ノ監督スル處タリ

引用書類

船川港灣調査報告書 縣ノ報告書

附言

船川港ハ陸上平地狹隘ニシテ而モ用水ニ乏シク容易ニ大市街ヲ成立セシメ得
ヘキ處ニ非ス又タ本港ハ鐵道ノ本線ヲ去ルコト七里ニシテ支線ニヨリ之ニ連絡
シ後方地ニ對シ輸送迂遠ナルヲ免レス元來其修築ノ目的ハ土崎港ノ外港タラシ
ムルニ外ナラサレハ將來土崎築港ノ成ルニ及ンテハ其功用今日ノ如クナラサル

ヘシト雖モ本港ハ日本海ノ航路ニ近ク寄航ニ便ナルヲ以テ港勢ノ衰退ヲ來スカ
如キコトナカルヘシ故ニ其修築ニ此上多大ノ工費ヲ投スルノ必要ナシトスルモ
既定計畫ハ之ヲ實行シ殊ニ島堤ハ之ヲ施工シ以テ港内ノ庇蔽ヲ完全ナラシムル
ヘキモノトス